

知的障害のある子どもを対象にした「伝統的な言語文化」指導プログラムの開発

宮野雄太（相模女子大学 学芸学部 講師）

本研究は、知的障害のある子どもを対象とした「伝統的な言語文化」指導プログラムの開発を目的とし、特に日本の昔話に焦点を当てて研究を行ったものである。背景には、学習指導要領において「伝統的な言語文化」に「親しむこと」が重視されるようになった一方で、知的障害児を対象にした実践的・体系的な指導研究が十分ではないという課題がある。研究は、「文献調査」「教員対象のグループインタビュー調査」「保護者対象の Web アンケート調査」「授業実践」の 4 つで構成した。

文献調査では、小学校国語教科書や教師用指導書など 27 冊を分析し、計 49 話の昔話教材が何らかの形で言及されていることを明らかにした。また、知的障害児用教科書では、「おむすびころりん」をもとにした教材しか確認されず、教材の不足が明らかになった。

グループインタビュー調査では、特別支援学校教員を対象に、市販昔話絵本を授業で使う際の工夫や課題を検討した。その結果、①背景知識の必要性、②文量の多さ、③絵本の構成、④同一話でも絵本ごとの差異、⑤昔話特有の言語表現への着目、⑥ヒドゥン・カリキュラムへの配慮、⑦子どもと絵本の関係性への理解、という 7 つの指導上のポイントが整理された。例えば、「ねずみのすもう」を理解するには、相撲や貧富差についての背景知識が必要であり、また絵本の文章量や絵の配置が理解に影響することが指摘された。さらに、研究者が学習指導要領の記述を元に作成した「昔話への親しみ態度チェックリスト」を提示することで、教員の視点が「読むこと」や「道徳的教訓」を教えようとする指導意図から、発端句・結末句や語りの特徴などの昔話固有の言語文化へと、教員の指導意図を焦点化する効果が確認された。

保護者対象の Web アンケート調査では、知的障害児のいる家庭から 208 名分のデータを得て分析した。昔話の読み聞かせ経験が最も多かったのは「桃太郎」「おむすびころりん」であったが、回答者 1 人あたりの読み聞かせ経験数は平均 2.59 話にとどまった。これに対し、市販絵本の読み聞かせ数は平均 8.01 冊であり、昔話絵本は一般絵本に比べて家庭で触れられる機会が少ないことが示された。また、現在興味をもつ昔話数の平均は 0.59 話であり、多くの子どもが昔話への興味を示していなかった。

授業実践では、インタビュー調査で得られた知見をもとに、「ねずみのすもう」を題材とした指導プログラムを試作し、特別支援学校で実践した。研究者は、市販絵本「ねずみのすもう」の指導書、独自教材『でんかしょ』を作成した。『でんかしょ』は、繰り返し表現、文章量の削減、色による登場人物の区別など、知的障害児が昔話の特徴に注目しやすい工夫を行った（図 1）。実践の結果、児童の学習の進展が確認され、教員からも「指導書」「親しみ態度チェックリスト」「でんかしょ」の有効性が評価された。

総合的に、本研究は、知的障害児向けの昔話教材や指導上のポイントを解説した資料が不足している現状を明らかにするとともに、市販絵本を用いた授業の具体的留意点や、昔話への「親しみ」を重視した指導プログラムを提案した点に意義がある。また、「親しみ態度チェックリスト」は、教員が昔話固有の学習内容に焦点を当てる支援ツールとして有効であることが示された。

図 1 独自作成『でんかしょ』の一部

